

UNTITLED

次の土曜はぜったい雨にならないで。蚤の市があるから。蚤の市には太陽の天蓋が必要な。動かせる広場、それが蚤の市。まるで尽きないデザインをもつ空飛ぶじゅうたんみたいに、蚤の市。まるで尽きないデザインをもつ空飛ぶじゅうたんみたいに、あらゆる場所へ降り立ったかと思えば、ふたたびくるくるって巻きとられてしまう。もっとも面白いのはそのフリンジかも知れない。ひもがもつれからまっでできているけど、運よく肝心の一本を引き当てると、途端にほどけて、ネクタイやショールや他の織物がつぎつぎと姿を現す。

あそこを見て。手ぬいのワンピースが妖しくも美しい。私には胸のギャザーがゆるそうでくやしいけど。でもその隣に広げられた黄色のパンツは、イカシテル。

蚤の市にショーウィンドウはない。その魅惑はかたちがなく、生き物のようだ。

だって手さぐりする指でつねに掘りかえされているから。ならべ方もいろいろ、地べただったり折りたたみテーブルの上だったり、いいかげんで、偶然や、場所がないとしても、展示方法に文句など言わせない。毛糸玉のように丸められた布地、無造作に重ねられたジーンズ、婦人服の山、もっと高い織物の山、片方しかない靴の列、そしてすこしだけ良質で、でも本当の愛好家には見向きもされないつるされた品。掘り出し物を探そうと思えば、不快な快感に引き寄せられつつ、ガラクタを押しつけて、このもつれた布切れの世界を歩いて行くよりほかない。つまり多くの場合メランコリックな調子の混乱した小山のなかに手を突っ込み、ドラロン、ペルロン、ナイロン、アクリル、さらに純羊毛100パーセントのフェルト地、金襴、そして絹などからなる、古ぼけたにおいのするもつれをほどかなければならない。たとえば流線型のアノラックの獣脂のような光沢を持つカラーを手にとってみた。高貴な品だけど安価。X年前には量販品だったものが、偶然にみちびかれ長い時を生きのびてきて、一点ものの風格を漂わせている。ドラマティックにいうなら、長い旅を経た品達は、私という救世主に出会いそして生き続ける。

そう、蚤の市とは、名もない品達の希少価値を、見せたり、隠したりする不思議な力を持った場所なのだろう。

蚤の市の品とスーパーのビニール袋は相性がいい。ガラクタはその境界をこえると、ごみ袋に直行するものだからだ。最終処分の直前に救われて、真の未来を掴むことができるのもガラクタである。蚤の市にふさわしいとみなされると、それ用の袋に回収される。そして、誰かが見つけてくれるまでガラクタ達は語りかけ続ける。その誰かとしか通じない特別な言葉で。見つかるとそれはビニール袋に入れら

れ、家に持ち帰られて、洗濯機にただちに放り込まれる。そして無名の一点ものとして装一式に加えられ、洋服ダンスに並べられる。新しい仲間にかこまれて、魅惑の一品へと花開く。おどろくべき変化とはまさにこのこと。たくみな支持者をとおして、古びたぼろきれにあらたな輝きをいわば強引に付与してしまう力。この「再ファッション化」は「再び身にまとうこと」以上を意味する。それは物への愛情、直感、メインストリームの服への反抗心。蚤の市は無尽蔵の資源。時にはまたごみ集積所への最後の分岐点。ある人々が物の世界から排斥したものを、別の人々が格別の流儀で再び受け入れる。

蚤の市と博物館は共通している。どちらも収集欲のなせる技。一方で気高い建物に守られ、神聖なものとして展示されるかと思えば、他方、屋外で最小限の区画に区切られ、新しいものも古いものもごちゃまぜに、手当たり次第世俗の事物の収集が繰り広げられる。ここでこそ、物たちは再び人に必要とされる取引へ復帰するチャンスを得るのだ。たいていの場合価値が高騰する形で。紆余曲折を経てついに見出された物への愛着は、あたりまえに手に入る商品よりずっと大きい。たとえ値そのものが上がったというわけではないにもかかわらず。

Karin Ruprechter / translation Yasuhiro Kurogo

NO NAME – NASCHMARKT. WIEN

エドウィナホールは蚤の市へ行く、の市へ行く、そこで様々なモード様式の、様々な時代の服を見つけてそれらの布から彼女のコレクション「OHNETITEL（無題）NASCH-MARKT WIEN（ナッシュマルクト ウィーン）*」のためのインスピレーションを得る。このようにして見つけた衣類は過去のモード、生活様式を示しており、そのモードを生んだ時代の文化史的な現象、その衣類の所有者が着ていた歴史と彼らの不在を語る。

この集められた古着は本来の場所と時間から引き剥がされて客観的であると同時に主観的な参照材料として、また歴史的な研究対象として、このまったく新しいコレクションで蘇るのだ。この着古され利用された衣類は過去のモード様式と生活様式の文化史の記録になっている。

エドウィナホールはこのコレクションではモード史や文化史の古典的なデザインとモデルを利用するのではなく、日常の衣服を研究してこれを引用したり現代的なも

のに作り変える。頼る方向はかつての時代のオートクチュールのデザインではなくて、たまたま見つけた日常的な衣類の数々、素材、色、飾り、歴史の中の日常の生活スタイルである。

実物の、時代を経た服がデザインの過程で研究対象としてとりこまれ、その一部になっている。探しだした衣類が解体され、分析され、変形され新しいコンテキストの中に取り込まれ、そして実現されたコレクションで何事かを物語る。それは映画の技法Found Footageで、集められ、たまたま見つかった写真や映像が分割され、新たに纏められ、アレンジされ、そして映像になって、この発見品を使った新たな物語が語られたり、見つかった材料の再構成から新たな美の地平が作り出されるのと似ている。

エドウィナ ホールのコレクションのテーマは現代モードのアイデアの源泉となっているモードの歴史のアーカイヴである。そのために普段着のモードの歴史のアーカイヴを意識的にインスピレーションの源泉だとして可視化したのだ。ここでは個々の服の歴史、これらの製品が辿るであろう行方が語られる。安物だろうとデザイン物であろうとこれらは等しくゴミ箱でなければ、蚤の市に流れ着くのだ。

モードの命のはかなさが並存するこの二番手の市場を必要とするのだ。古びた服はいままで価値と値段の体系からずり落ち、市場の商人によって位置を決められる。二番手市場は固有の判断基準と価値判断で動く。製品の価値はここではブランド商品かどうかではない、それどころか安物の偽物に負けることもあるだろう。独自の法則とさまざまな生き残りの技術とがこの市場の特徴である。これらの市場は公式の市場に、販売と製造上の革新のヒントを提供する限りは、また各政府が引き起こす経済的な混乱の緩衝材となったり、公式市場の邪魔にならないという限りは大目に見られている。だからこのような市場はまた移動するのも特徴であり、必要に応じてその居場所を変えたりする。新しい市場形態や販売方法をこれらの市場は決定する、これは自主的に組織された商業・経済形態としてみることも可能であり、新しい分配システムを持っている。

エドウィナ ホールはこのコレクションでいまのモード市場でのやり方に疑問を投げかける。市場が二番手市場、ロケーション、テーマとしてこのコレクションの制作と展示の中に含まれている。二番手市場のやり方を通じて公式市場のメカニズムが見えてくる。この二番手市場の展示方法、すなわち商品の山積みはエドウィナ ホールの場合重要である。服の山があちこちに置かれ、潜在的な買い手にかき回してもらいたいと訴える。エドウィナ ホールの新しい服は見つけれることを待っている。演出されて配置された無名製品の数々はブランド製品信仰とデザインの資本主

義化への皮肉をこめた異議申し立てである。商品が商品であるのは製品であって、製品の名前ではない。

モードのメカニズム、ブランド化、市場の占有、モードの独裁、虚栄の演出、一口に言えば製造と販売テクニック上の現象としてモード市場がこのコレクションのテーマである。エドウィナ ホールのモードは現実世界の側にあたって、虚偽の世界を作り出すイメージややり方とは無縁である。現実と日常とが変形過程のために見出された出発点であり、この変形過程では解体と分析を経て新しい構造の組み合わせとヴァリエーションが生み出され、あたらしい依存関係ができあがる。

*NASCHMARKT（ナッシュマルクト）：毎週土曜日に開催される、ウィーンで最も大きいフリーマーケットの名称。食料・生活雑貨・服飾雑貨等が揃う。

Sabine Winkler / translation Masako Kikuchi



「ズボンの本質（もしそのようなものがあるなら）とはなにか」

「確かにデパートのハンガーに掛かっている形を整えられた滑らかな代物ではない。むしろ伸び盛りの子供が脱いで、ポンと床に投げ捨てた、くたっと、だらしなく、放りっぱなしで落ちている布の塊である。品物の本質はその不用と関係がある：これは必ずしも使用したあとになお残る部分とではなくて、使用済みになった何かと関係がある。」

Roland Barthes

この「無題/Un-titledナッシュマルクト.ウィーン」というプロジェ

クトは、ウィーンのナッシュマルクトを例にして「蚤の市」を、さまざまなモードスタイルや各時代の服を探し、発見し、選び出すこと、また新しいモードの言説のインスピレーションとして利用するということを主題にしています。「蚤の市」、それはある意味捨てられたモノが何でも集まる場所であり、我々の社会における飽和的な商品世界を歴史的な断面として示した場所と言えます。雑多を極める我々の文化の産物が、無秩序に何気なく陳列される「蚤の市」は、デザイナーたちの作業場でもあります。彼らの五感を通じて、服は見出される時を待っています。しかもその本来の姿で、かつラベルやマーケティングというブランドの威光もない姿で。見出される服のアイデンティティを主張するのは、生まれ持った製品そのものであり、製品のネームではありません。

見出された服は時を超えた「再解釈」のための思考の出発点となり、実際に作品を作る際の素材ともなりえます。

20世紀の末、ハイファッションにおける領域では、セカンドハンドの服のDe-constructionとRe-constructionが流行し、古着がその時代のモード界に出回りました。ちょうどそれらが理論的な言説を挑発したのと時を同じくします。まさにこの時代、さまざまな文化的なタブーが打ち破られて、古着の交換が世界的な規模で行われました。これは本当に需要があったということだけではなく、モードアヴァンギャルド側の興味を引き起こした結果とも言えます。

「オルタナティブ」な生活スタイルに代表されるサブカルチャースタイル、これが古着の価値を「再解釈」する基礎をニーズとして生み出し、次第にメインストリー

ムを左右するようになると、セカンドハンドの服／ヴィンテージものとして西欧諸国で確固とした地位をしめるようになり、皮肉にも世界のモード界では現代的またはポストモダンとみなされるようになりました。

もちろんこの再利用／Re-useという現象の前提、基盤になったのは、需要以上の生地や服を過剰生産する社会です。Re-useは現代のグローバルな時代において、まったく奇妙な特性を生みだします。すなわち、慈善事業組織とセカンドハンド商売を繋ぐ長い連鎖が、世界の富豪たちと極貧層とを結びつけるものとして意味を持ちます。-それは偶然にも同じ服に手を通すという親密さで。

「蚤の市」という現象の社会-文化的な側面も見逃してはなりません。つまり「蚤の市」というものはさまざまな国でそれぞれ違った固有の価値基準、価値概念にしたがって異なった機能を持ち、必要と需要にしたがって異なった形態を持ちます。

「蚤の市」は、政府が引き起こす経済的不況の影響を和らげたり、ある種の社会グループが良い品質のものや、スタイルとその変化を手に入れるのを助けたり、なにより必要な服の需要を満たしてくれるのです。

translation *Masako Kikuchi* / Miori Takahashi